

特集②

Wikipedia「河原郁夫」の立項経緯と
ご逝去にあたって

松岡義一（渋谷星の会/JPA 関東プラネタリウムワーキンググループ）

1. 河原郁夫先生について

1957（昭和32）年4月1日、渋谷に天文博物館五島プラネタリウムが開館しました。その初代解説者のお一人であった河原郁夫先生[1]が、2021年3月21日にご逝去なさいました（享年90歳）。かわさき宙と緑の科学館にて最後の解説をなさった翌朝のことでした。

河原先生は、神奈川県立青少年センターの開館準備のために同館に移籍され、約35年間の在籍期間のうち天文課長を18年近く務められました[2]。1997年（当時66歳）からは川崎市青少年科学館に移られ、2012年（当時81歳）からは「かわさき宙と緑の科学館」としてリニューアルした同館にて特別投影『星空ゆうゆう散歩』を月1回（2019年度からは2か月に1回）担当されていました。先生は、64年間にわたって、最後の最後まで現役でありつづけられたこととなります。

先生は、そのご見識と穏やかなお人柄で後進の尊敬を集められ、大きな足跡を残されました。直接の薫陶を受けられたかたに、若宮崇令さん（川崎市青少年科学館 初代天文担当、のちに館長）や岩上洋子さん（平塚市博物館 初代天文担当）がおられます。先生が1976年に執筆された『プラネタリウム解説法』（五藤光学研究所）は、解説者にとって稀有な教科書となっていました[3]。ほかにも、さまざまな形で先生の影響を受けられた数多くのかたがたが、プラネタリウムはもちろんのこと、各界で活躍されています。

先生が解説者となられた原点には、小学生のころ、東京初のプラネタリウム・東日天文館（1938年開館、1945年焼失）に通われていたご体験があります。鈴木敬信氏や野尻抱

影氏らによる日本の草創期のプラネタリウム解説に接しておられた先生は、まさに歴史の体現者でいらっしゃいました。

2. とくに印象に残ったこと

わたしが河原先生の聲咳に接するようになったのは2012年からでした。先生のプラネタリウム解説でとりわけ印象深かったのは、時おり語られる、野尻抱影氏に随行された若き日の思い出でした。先生は、神奈川県立青少年センターの朝比奈貞一館長を野尻抱影氏が訪問するたびに、職場を早退されて横浜の中華街に「お供」をなさったのだそうです。「野尻抱影先生は老酒がお好きで…」といったお話を伺っていると、歴史上の存在が、近くに感じられたものです。

15歳から太陽観測を始められ、ライフワークとされていた先生は、104歳で迎えられる2035年の皆既日蝕を楽しみにしておられました。おそらく孫弟子に当たるかたのお名前を挙げられ、ユーモアを交えて愉快そうに「彼に連れていってもらふ約束になっています」とおっしゃっていたことが、その笑顔とともに思いかえされます。

3. 生涯最後の投影

新型コロナウイルス禍で『星空ゆうゆう散歩』が休止になる直前の2020年1月まで、河原先生は矍鑠（かくしゃく）となさっていました。2020年10月19日、先生に続いて若宮崇令さんが川崎市文化賞を受賞されたときも、お元気なご様子でお祝いにいらしていたと伺っています。

3月20日の16時半、河原先生は車椅子で

プラネタリウムのドームに入られました[4]。先生のお声はいつになく弱々しく、そのお話は、体調を崩されたことのお詫びから始まりました。なんと「背骨」と「肺」を痛められたとのこと。今回、機器の操作は先生の代わりに國司眞さん(かわさき宙と緑の科学館 前学芸員)がなさるとのことでした。

投影が始まり、きょうの太陽が沈んで、プラネタリウムのドームに最初にポインタが投影されたときのことで。逆向きに映し込まれた矢印が、目的の位置までなかなか届かないまま、力なく下方に落ちていきました。それを目にした人はみな、息を呑んだのではないかと思います。先生は、そのような体調にもかかわらず、その後も生解説で星空を語られました。

途中からは、マイク越しに荒い息づかいが聞こえることが増え、かなり苦しそうな様子でした。メインテーマだった南十字星の話題については、先生の代わりに國司さんが少しだけ説明をなさいました。

投影の終盤にさしかかると、先生は、ご自身の体調について再度お詫びをされ、「養生いたしまして、できたらもういっぺん、もういっぺん、健康な状態で、みなさんとお会いしたいと思います」とおっしゃいました。

翌朝の太陽が昇るとき、先生は、「静かな夜明けです」と静かに述べられ、いつものように力強く「みなさん、おはようございます」とごあいさつをされました。最後も、いつもの「ご清聴ありがとうございました」で締められました。

先生は、まさにその「翌朝」に、90年のご生涯を閉じられたのです。

当日配付されたリーフレット[5]には、「私の『ゆうゆう散歩』は今回で終わりになります」とありました。投影終了時、弘田澄人さん(かわさき宙と緑の科学館 学芸員)から、これからも一年に一度はコンソールにお立ち

いただけないものでしょうか、とのお話がありました。先生は快諾されましたが、それがかなうことはありませんでした。

4. Wikipedia の立項過程

2020年10月18日、ウィキペディアンの小林道生さん[6][7]が本会を通じて「Wikipedia で天文教育・普及」ワークショップを開かれました。小林さんからネット上の百科事典として知られる Wikipedia の編集方法をご教示いただき、わたしにできることを思案した結果、天文の教育・普及に携わっておられる人物について立項を試みることにしました。

立項されていそうでされていないかたというのは、案外いらっしゃるものです。思い浮かぶなかから、まずは井上毅さん(明石市立天文科学館)、つづいて大西浩次さん(国立長野工業高等専門学校)、そして永田美絵さん(コスモプラネタリウム渋谷)と立項していきましました。かねてより直接お話を伺う機会が多いかたがたとはいえ、実際にご活躍を追っているのはせいぜい7~8年ですので、出典を調べていくなかで初めて知ることや気づくことが多くあります。そうして、Wikipedia の文法をかじりつつ、試行錯誤しながらまとめていく経験を少しばかり積んだ上で、いよいよ河原先生に取り組みました。

幸いにも、わたしが所属する渋谷星の会の小川誠治さんは河原先生と師(水野良平氏)を同じくされており、先生についての資料を多数お持ちでした。また、2年前には、先生を描いた富岡一成著『ふらべん 88歳の星空案内人 河原郁夫』(旬報社)[8]が出版されており、機が熟している感がありました。

小川さんにご相談しつつ下書きを仕上げた段階で、若宮さんと岩上さんに内容をご確認いただき、つづいて先生ご本人に印刷したものを確認していただきました。11月25日に

先生にお電話を差し上げたところ、「このとおりでよろしいかと思います。よくここまで調べられましたね、驚きました。感心しております」とのお言葉をいただきました。

その後、年初にいただいた賀状はしっかりとした筆跡で、まったく衰えなど感じられませんでしたので、なおさら3月20日の最終投影でのご様子は衝撃的だったのです。



図1 Wikipedia「河原郁夫」の冒頭部分。立項時は気分が高揚したが、訃報を反映する作業は悲しみが増すばかりであった。

5. Wikipediaの扱われかた、扱いかた

河原先生については、さらにエピソードを盛り込む準備を進め、確認事項を整理してお伺いするつもりでございました。それがかなわないことは、まことに残念でなりません。とはいえ、お元気なうちに内容にお墨付きをいただいた上で公開できたことと、ご本人にお喜びいただけたことは、なによりありがたいことと感じています[9]。

本稿の執筆時点で、ブラウザでGoogleを開き、キーワード「河原郁夫」で検索すると、1件目にWikipediaの項目が表示され、画面右側には別枠で冒頭部分そのまま引用されます。立項してから間を置かずして反映されることにも瞠目しました。先生よりもかなり下の年代にあたる大西さんと永田さんの検索結果[10]を見ても、表示される順位には若干の変動があるものの、誰しもの目を引く存在感を持つことは明らかです。こうした扱いが、(現時点における)Wikipediaの最大の強みであることを実感しました。

Wikipediaの「根本的な方針」には「中立的な観点」が定められており、編集する上で常に意識しなければなりません。それでも、人物について記述する際には、対象への思い入れがなければ、なかなかまともな形にはならないように思います。敬意をいにくかたがたを宣揚したいとの思いから取り組んだ結果がこのような形で現れると、より多くのかたについて、より詳細かつ正確に記したいとの思いも強くなりました。

今後は、新規立項のほか、他人の手によって立項済みの項目の修訂も行いたいと考えています。ご助言などをいただけますと幸甚に存じます。

6. おわりに

いまから64年前に河原先生がプラネタリウム解説を始められたとき、日本にはプラネタリウムが3施設しかありませんでした。現在、その数は全国で300を超えており、米国に続いて世界第2位です。日本におけるプラネタリウムの来場者数は年間800万人を超えるとも試算されています[11]。こうしてみると、先生をはじめとする多くの先達から連綿として続く系譜のもと、いまの姿につながっていると感じます。

2023年には「プラネタリウム100周年」[12]を迎えます。ここに、かけがえのない存在であられた河原郁夫先生のご功績とお人柄を偲びつつ、プラネタリウム界のさらなる発展と、プラネタリウムにかかわる多くのかたがたのますますのご活躍を心から祈りたいと思います。

東日天文館の投影で用いられていた音楽をきっかけにクラシック音楽に親しまれた先生が、最後の投影の夜明けに用いられた曲は、ヘンデル作曲『オンブラ・マイ・フ』の弦楽版でした。先生は、きっと、天国のプラタナスの木陰で穏やかにお身体を休めていらっし

やることでしょう。

註 釈

- [1] 本会の会員ではなかったのですが、本稿でも「先生」と呼ばせていただくこととした。
- [2] 通例であれば3年で学校の管理職などに異動になるところを、それを望まれずに天文課長職にとどまり続けられたとのことであった。定年後も同館に残り、解説を続けられた。
- [3] 一例として、荒川区立プラネタリウム館（2013年に閉館）の最後の解説者となった杉本幸子さんのケースが挙げられる。杉本さんは中学校の理科教員を退職された後に初めてプラネタリウム解説に携わられた。6年半の間、毎月60分間の生解説投影を構成されるにあたって、館にあった『プラネタリウム解説法』をよすがとして取り組まれたという。
- [4] 当日のご様子については記憶とメモを元にしており、正確性を保証するものではないことをお許しいただきたい。
- [5] 毎回、当日のテーマと構成が記されたA3二つ折り（4ページ）のリーフレットがチケット購入時に配付されていた。
- [6] 小林道生（2019）「一般普及に向けた「Wikipedia」天文学関連記事編集の意義と課題」第33回天文教育研究会集録,147-150
- [7] 小林道生（2020）「Wikipediaの記事編集による一般普及活動」第34回天文教育研究会集録,139-142
- [8] 本書の記述の確かさについて先生に伺ったところ、発言内容や発言者については事実ではあるが、著者による脚色が施されている箇所がそれなりにあるとのことであった。渡部義弥さん（大阪市立科学館）による「書かれた詳細が真実かどうか悩ましく感じられる」との指摘（「天文月報」2020年7月号）についても、「たしかに当たっていると思います」「史料としてはどうか

と思う点があります」とのことであった。それは著者によるあとがきに「作品づくりの欲求もすくなくならずあった」とあることから読みとれる。したがって、Wikipediaには、本書にしか紹介されていないエピソードは反映していない。

- [9] 今後も、引き続き各種資料を対照した上で慎重に追記を行っていく。
- [10] 井上毅さんの場合は、日本近代史における重要人物である井上毅（こわし）が存在するため、「井上毅（学芸員）」で立項した。公開後、小林道生さんが「井上毅」のページの冒頭に“Otheruses”テンプレートを用いて《この項目では、政治家について説明しています。学芸員については「井上毅（学芸員）」をご覧ください。》との文言を設定してくださった。このため、「井上毅」で検索した結果の最上位に表示される当該ページを経由することで、容易にたどりつくことができる。
- [11] プネタリウム基礎調査 2020 速報（JPA 日本プラネタリウム協議会）
<https://planetarium.jp/info20201019/>
- [12] 1923年、ドイツにおけるツァイスI型の登場が近代プラネタリウムの誕生とされる。日本初のプラネタリウムは1937年に大阪市立電気科学館に導入されたツァイスII型（現在は大阪市立科学館に静態展示）で、その翌年には東日天文館にも同型機が導入された。



松岡義一